２５．佐々木　紀彦氏（PIVOT 株式会社　代表取締役社長 CEO）

「北九州市には、「いろんなものを受け入れて、新しいチャレンジをしていくまち」であってほしい。」

佐々木　紀彦（ささき　のりひこ）
北九州市アドバイザー。北九州市出身。
慶應義塾大学総合政策学部卒業。
スタンフォード大学大学院修了。
東洋経済新報社に入社。東洋経済オンライン編集長を経て、ユーザベース社に転職し、NewsPicks 創刊編集長、NewsPicks Studio 社長などを歴任。2021 年 6 月にビジネス動画メディアを手がける「PIVOT」を創業し、代表取締役社長 CEO に。

「良い意味で「雑多」で「ワイルド」」

北九州市は、昔からアジアの玄関口として、多様な人々がやってきた土地です。私の祖父も、鹿児島から医師として北九州に移住してきましたが、過去からずっと住んでいる人だけではなく、様々な人が新たに入ってきている土地であると言えます。また、国内だけではなく、アジアからも人が来ており、まさに「人の坩堝」だと言えます。

北九州市をそれで表すと、良い意味で「雑多」で「ワイルド」だと思います。様々な背景を持つ人が雑多に混ざり合うことで、ワイルドな活力やエネルギーが生じている。それが北九州市の良さであり、そのような地域特性を今後も維持していくことが望ましいと思います。

「ポテンシャルの「見せ方」をどうするか」

北九州市の最大のポテンシャルは、ロボット産業やグリーン産業で、グローバルに通用する企業があることです。また、産業が発展している中でも、自然が近くて暮らしやすいことも、大きな魅力の一つでしょう。

ポテンシャルや魅力についてのアイデアは、おそらく出尽くしているのではないでしょうか。むしろ、それらのポテンシャルをどのような見せ方で発信していくかを検討することが求められます。数多ある魅力の中でも、特にインパクトが大きいものに絞って、「これが北九州市の魅力だ！」と見せていくことが非常に重要です。

特に、今の時代は、目立つ人がいて、その人の発信によって物事を認識することが多くなっています。したがって、抽象的な魅力ではなく、特定の人物やプロジェクトなど、具体的なものを見せていくことがキーになってくるのではないでしょうか。「魅力の語り部」と言ってもいいかもしれませんが、象徴となる存在をつくり、そこを通して魅力を表現することが求められます。

そのような意味では、一つでもいいから、「北九州といえば○○」というものが、全国的に認知されることが望ましいでしょう。誰もが共通で思いつくものでもよいですし、例えばエンジニアなら「北九州といえば㈱安川電機」など、特定の領域ごとにあってもよいと思います。

「課題を真っ先に解決する都市」

日本は課題先進国と言われていますが、その

日本の中でも、課題を真っ先に解決していく都市というのが目指す方向でしょう。北九州市は、100 万人近い人口規模があり、様々なことに挑戦しやすいポジションにあります。例えば特区を活用するなど、大都市だからこそ課題を解決できる基盤もあります。

その中で、「テクノロジーを生かした実験が行われているまち」という、非常にポジティブなイメージを与えることができると考えます。

例えば、高齢化に伴い、タクシー運転手の確保が難しくなっていることが課題の一つになっており、ライドシェア活用の検討も進んでいますが、北九州市はトライするのにちょうどよいまちの規模です。サンフランシスコではタクシーの自動運転が始まっていますが、北九州市でも、過疎エリアでトライアルができるのではないでしょうか。

また、ロボット産業は、「日本の最先端」による課題解決の象徴になり得ると思います。無人化など、人口減少を逆手に取ってアピールができる分野です。グリーン産業でも、洋上風力発電等をもっとアピールしていくべきでしょう。

それ以外では、福岡市を「てこ」としつつ、北九州市との違いを明確にすることによって、福岡市に来る人を北九州市にも誘導するなど、近隣都市の存在をうまく活用した魅力の発信ができればよいと思います。福岡市の主要な産業はサービス業ですが、北九州市ではものづくりであるなど、様々な面で差異があるので、福岡市をベンチマークとして、北九州市の魅力を差異化することも考えられます。そのような意味で、福岡市は、良き味方にも、良きライバルにもなり得るでしょう。

「新しいことに率先して取り組む」

北九州市には、「いろんなものを受け入れて、新しいチャレンジをしていくまち」であってほしい、これが率直な思いです。

北九州市を表す際に、「ワイルド」という言葉を使いましたが、そこには、雑多な人々が集まっているというだけではなく、「新しいことに率先して取り組む」という意味合いも含まれています。北九州には、新しいことに前向きで、細かいことをうるさく言わず、いろんなことを試してみようという、良い意味でのラフさがあります。

「失敗してもいいのでやってみよう」という雰囲気があり、いろんなことが試せるまちなら、若い人や起業家精神のある人が集まってくるのではないでしょうか。

また、武内市長は英語教育にも力を入れておられますが、多様な人々が来るアジアの玄関口という、昔からあるポテンシャルを生かす上で、国内外からの移住者も見込めます。インターナショナルな都市になり、多様な人材が集まれば、産業を支える人材が獲得でき、産業振興にもつながるでしょう。

それに向け、自身も地元にできる限り貢献したいと考えています。